



開講式

平成29年9月19日(火)

愛知県看護協会



摂食・嚥下障害看護認定看護師教育課程の
開講式が行われました♪



北海道から沖縄まで、全国から32名の受講生が集まりました。

半年間、共に学び、切磋琢磨して、摂食・嚥下障害看護認定看護師を目指します！



インタビュー

旭川赤十字病院

中橋 水穂



私はこれまで、脳神経外科病棟と集中治療室を経験し、多くの摂食嚥下障害患者と関わってきました。ある方は訓練によって経口摂取が可能となり、それをきっかけに医療者の想像を超える回復を見せてくれました。しかしその一方で、看護師の知識・技術不足により経口摂取に繋げることができなかつた方もみえました。こうした患者との関わりの中で、再び食べることができた喜びや、食べることができない苦しみに触れ、「食べる」ことの大切さを実感してきました。

超高齢社会となった現代の医療現場では、摂食嚥下障害患者が増加しており、誤嚥や窒息のリスクも高くなっています。そのため、患者の一番近くにいる看護師には、患者が「安全に楽しく食べる」ために、より専門的な知識と技術が求められます。

私はこのような現状のなかで、より専門的な知識・技術を学び、看護の質の向上を目指したいという思いを強く抱き、摂食・嚥下障害看護認定看護師を目指す決意をしました。

開講当初は、慣れない環境での生活に不安もありましたが、全国から同じ志を持って集まった仲間達とも少しずつ打ち解け、情報交換や共有をしながら楽しく学んでいます。これからの6ヶ月半という限られた時間の中で、お互いに励まし合い、よい刺激を与え合いながら、より多くの学びを得られるよう頑張りたいと思います。そして一人でも多くの患者が「安全に楽しく食べる」ための看護を実践し、さらにはその看護を院内だけでなく、地域にも広めていけるような摂食・嚥下障害看護認定看護師になり

五条川リハビリテーション病院



私が勤務する病院は、^{急性期}と在宅とをつなぐ回復期リハビリテーション病院であり、摂食嚥下障害を抱えた患者が多くいます。その中には、誤嚥性肺炎を発症したことで口から食べることが困難となっただけでなく、在宅に帰るという希望も叶わずに最期を迎えた方も見えました。その様な患者を見送った時、自分に何が足りなかったのか自問自答し、無力さや不甲斐なさを感じていました。こうした経験から、何もできなかった自分を変えたいと思い、食事介助や呼吸器リハビリの勉強会、摂食嚥下リハビリテーション学会などに積極的に参加し、知識や技術の向上を図りました。

自らの知識が少しずつ向上したことで、リハビリスタッフが今何をやっているかということにも興味を持ち、自ら進んで情報共有を行うようになりました。どうしたらリハビリが円滑に進められるのかを考え、環境を調整し、患者が普段行う離床や洗面、口腔ケアなどが食事のリハビリになることを学び意図的に取り入れました。そうした関わりを続ける中で、食事が食べられなくなった患者がたった一つの小さなゼリーを食べ、涙を流して喜ぶ姿を見ることができました。そんな患者や家族の喜びを目の当たりにし、「食べたい」という思いにもっと応えたいと考え、摂食・嚥下障害看護認定看護師になる道を選びました。

開講してから1ヶ月が過ぎ、看護管理、医療安全管理など、これまで意識してこなかった管理の視点から物事を考える講義や、摂食嚥下障害病態論、摂食嚥下機能評価論などの専門的な知識の講義を受けています。グループワークも多くあり、その中で積極的に意見交換し、協力しあう仲間を見て刺激を受けています。半年という短い時間ですが、仲間と共に喜め合い、32名全員で教育課程を修了し認定看護師になれる様頑張ります。